

キハダ 大西洋

Yellowfin Tuna, *Thunnus albacares*

管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会(ICCAT)

最近一年間の動き

最新の資源評価は 2003 年で、その後追加情報はない。1997 年に勧告された小型魚の漁獲規制は、2005 年に廃止が勧告され、2006 年より施行された。総漁獲量は 2001～2005 年は減少傾向で、特にまき網漁業で減少している。

生物学的特性

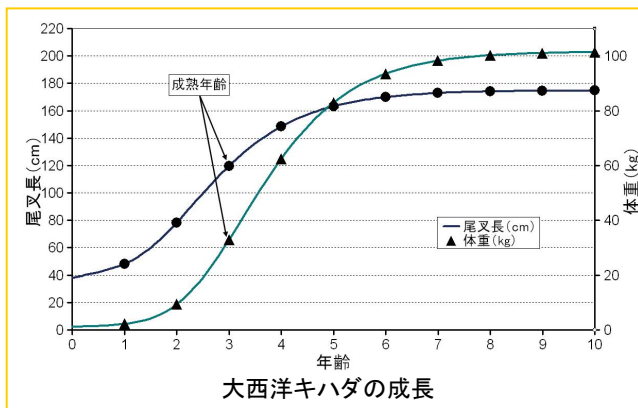
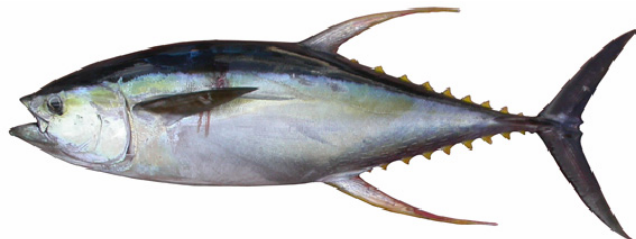
- 寿命: 7～10 歳
- 成熟開始年齢: 3 歳
- 産卵期・産卵場: 周年・表面水温 24℃以上の海域
- 索餌場: 温帯・熱帯域
- 食性: 魚類・甲殻類・頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

漁業の特徴

主な漁業国はフランス、スペイン、ガーナ等である。日本はすべてはえ縄漁業でメバチ等とともに漁獲している。フランスとスペインはまき網、ガーナは竿釣りが主体である。1975 年頃から、漁獲はまき網漁業が主体となっている。漁場は熱帯域を中心に広く分布し、まき網と竿釣りではギニア湾が主漁場である。漁業は周年行われている。

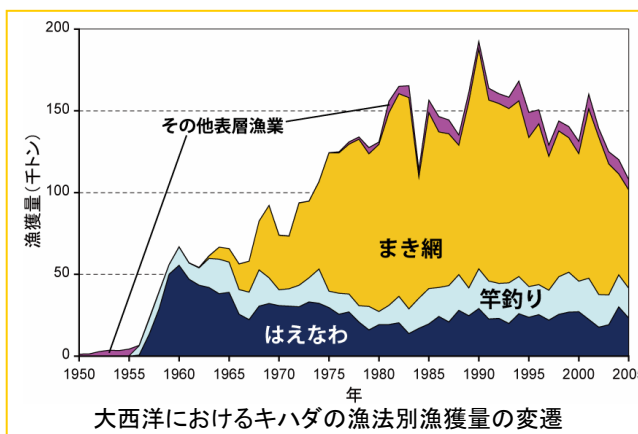
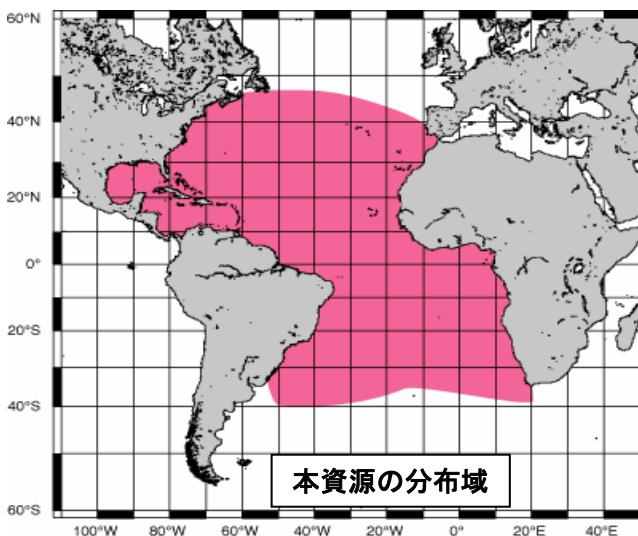
漁獲の動向

本資源の漁獲量は 1973 年までは 10 万トン以下の水準だったが 1974～1983 年に急増した。この増加は大部分がまき網漁業による。1985 年以降は、若干の変動をしながら 11～19 万トンで推移している。近年は全体の漁獲量は減少傾向で、漁法別では、竿釣り漁業はほぼ横ばい、まき網は減少、はえ縄は変動を伴う横ばいである。日本の漁獲量は、近年減少傾向だったが、2004 年にやや増加している。



利用・用途

刺身、すし、缶詰など



資源状態

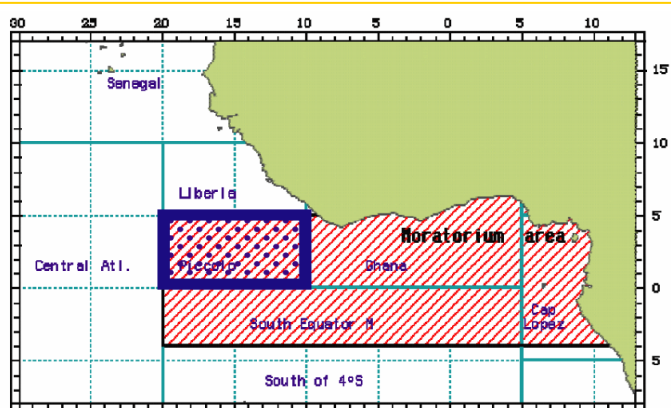
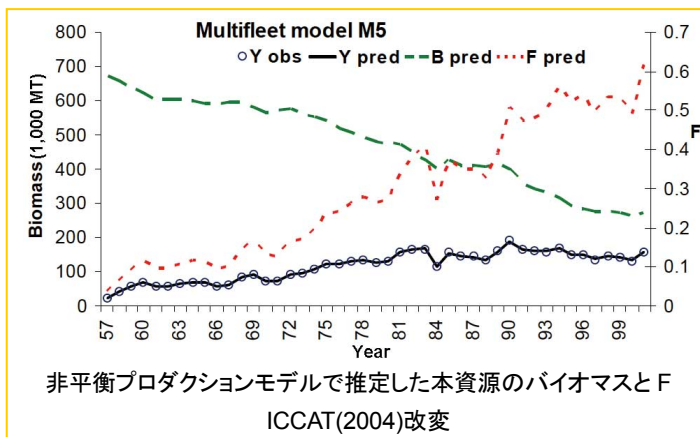
年齢別漁獲尾数によるモデルで推定の資源量では、2歳以上は近年減少している。年齢別漁獲尾数によるモデルと資源量・余剰生産量によるモデルで推定のMSY(最大持続生産量)(2001年時点)は14.7~16.1万トンで、平均すると現状(2001年)の漁獲(15.9万トン)をやや下回る。また、漁獲死亡係数FもMSYを与える値(F_{MSY})前後と推定された。従って、資源の利用は乱獲ではないが満限に近く、努力量をこれ以上増やさない方が望ましい。

管理方策

1973年に「3.2 kg未満のキハダの漁獲尾数は全体の15%以下とする」と勧告されたが、遵守されなかった。この勧告は、2005年に廃止が決定された(2006年より施行)。1993年のICCAT行政官会議では、「有効漁獲努力量は1992年レベルを超えないように」と勧告している。1997年末期以降、東大西洋で、小型まぐろ類の混獲減少のためにまき網漁業の流れ物操業のモラトリアムが実施されていた。これに代わり、2004年のICCAT行政官会議では、11月のギニア湾の一部ですべての表層漁業の操業禁止が勧告された。

資源評価まとめ

- 資源評価はICCATが実施
- 資源量と余剰生産量によるモデル、年齢別漁獲尾数によるモデルで資源評価
- 資源は高度に開発されている



大西洋の流れ物操業もしくは表層漁業のモラトリアム実施海域
赤斜線部: 11~1月、流れ物利用のまき網の禁漁、1997~2004年
青点: 11月、全ての表層漁業の禁漁、2005年~ (ICCAT 2001a 改変)

資源管理方策まとめ

- 有効漁獲努力量は1992年レベルを超えないようにする(1993年勧告)
- 1997年より時期と海域を指定して(図参照)流れ物を利用した操業のモラトリアムを実施していたが、2005年よりこれに代わり、ギニア湾の一部の海域(0~5°N、10~20°W)で全ての表層漁業を禁止。

キハダ(大西洋)の資源の現況(要約表)

資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近5年)	10.8~16.0万トン 平均: 13.1万トン
我が国の漁獲量 (最近5年)	2.1~5.9千トン 平均: 3.5千トン